



一昨年から昨年にかけて、半世紀以上にわたってわが国の精神医学を牽引してこられた方々の訃報が相次いだ。2021年8月に木村敏氏が、同年11月に保崎秀夫氏が亡くなられた。2022年4月には西園昌久氏の急逝の報に驚いた。続いて、同年8月に中井久夫氏が、そして10月には原田憲一氏が物故された。1980年前後に精神医学を専攻し始めた者にとって、これらの先生方はまさに仰望すべき巨星群であった。今日、いくつもの輝く星々が忽然と消えてしまった暗黒の宙空を見上げると、たとえようもない喪失感に襲われる。1冊の大きな書物がついに閉じられたのだ。謹んでご冥福をお祈りしたい。

著者個人は、直接の門下ではないが、晩年の西園氏と中井氏の聲咳に接する機会が度々あった。西園氏は、第2次世界大戦後、都内で開業していた古澤平作のもとで精神分析療法を学び、わが国の精神科臨床にその理論と実践を普及させようと尽力された。一方、同じく古澤の指導を受けた土居健郎に類稀なる異能を見出されたのが、中井氏であった。やがて1960年代末から1970年代初頭の大学と学会の最も厳しい時代に二人は立ち会った。そのように、ほぼ同じ時代にわが国の精神医学・医療の空気を吸い、ともに精神医学の講座担当者を務めた両氏であったが、精神科医としてのたたずまいはまったく異なっていた。二人とも義人たるヒューマニストであり、何より人間全体に対する旺盛な好奇心を抑えることができない医師であったが、対極に位置するように思われた。そもそも両氏を比較すること自体が愚かしいのかもしれないが、実際、二人が直接に接することは稀であったように思う。

二人の違いを示す資料として、2006年5月に福岡市にて開催された第102回日本精神神経学会総会におけるそれぞれの講演を引用してみたい<sup>1,2)</sup>。まず、西園氏は講演の抄録において、次のように指摘した。

『神は死んだ』(ニーチェ)といわれた社会状況の中で多発したヒステリーの治療法として精神分析ははじまったが、治療目標として力説された洞察は神の秩序にかわる父

性性と知性原理にもとづくものであった。〈中略〉第2次世界大戦後、精神分析の世界ではポスト・フロイト精神分析といわれるいくつかの流派が発達したが、『マリアの癒し』を再現するかのように、母性-情性優位の相互関係性を強調するものとなっている。しかし、最近ではその限界も感じられる。筆者の認識からすると、脅す父親でなく、導く父親の存在が期待される<sup>2)</sup>

いかにも西園氏らしい有無を言わさぬ筆致に懐かしさで胸がいっぱいになる。実は、「同じ釜の飯を食う」ような共同体への帰属意識を関係性の基本と考えられていたのだった。

かたや、中井氏の講演<sup>1)</sup>は、奇しくも「パターンリズムの去った今、それに対応する問診と治療の見直しが必要である」で始まり、次の一節で終わる。

「世にカリスマ医者が溢れても、精神科医だけはカリスマ医師はありえない(山口直彦)。日々の糧を得るための仕事を果たしてゆくことが精神科医の本領であろうかと私は思う<sup>1)</sup>

思わず背筋をピンと伸ばしたくなる文章である。中井氏によって、わが国の精神科医は初めて職業人としての品格(integrity)を意識したのだ。

思うに二人は、1970年代以降のわが国の精神医学の再構築において、それぞれが唯一無二の使命を果たされたのであろう。かくも両極にある二人の巨人のそばに近づけたことを、今はただ幸せであったと思う。

黒木俊秀

## 文献

- 1) 中井久夫：統合失調症の経過における治療者・患者間の最小限の情報交換。精神経誌, 109 (2); 179-183, 2007
- 2) 西園昌久：減びつつある人類の不安と精神医学—精神療法の時代性・文化性の意味—。精神経誌, 109 (1); 76-80, 2007